

連載 オブジェクト指向と哲学 第 82 回 デカルト、炉部屋の夢

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

デカルト (1596 - 1650) は「省察」本文の冒頭に『まだ年少のころに私は、どれほど多くの偽であるものを、真であるとして受け入れてきたことか』さらに『その後、私がそれらのうえに築きあげてきたものは、どれもみな、なんと疑わしいものであるか』だから『もし私が学問においていつか堅固でゆるぎないものをうちたてようと欲するなら、一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない』と何年も前から気づいていたと自分の人生目標を述べています。[1]

●夢か現実か

真と偽を見極め「最初の土台から新たにはじめる」ための第一歩こそは有名な「我思う故に我在り」です。その方法論は、1641 年出版された「省察」より前 1637 年に「方法序説」として出版されています。

デカルトは感覚を疑います。自身の直接的感覚は案外あてになりません。間接的感覚、親や教師などの感覚に基づいて教えられてきたことも疑います。

今自分は本当に覚醒しているのかそれとも夢を見ているのか、も疑います。『夜の眠りの中で、いかにしばしば私は、ふだんのとおり、自分がここにいるとか、上衣を着ているとか、炉ばたに坐っているとか、信じることであろう。実際は、着物を脱いで床の中で横になっているのに。』[1]

デカルトはもしも荘子の「胡蝶の夢」が翻訳されて手元があれば興味を持って読んでいたでしょう。自分は蝶になった夢を見ていたのか、それとも自分は蝶で人間になった夢を見ているのか一体どちらが本当だと言えるのだろうか。

●炉部屋の夢

『デカルトがストックホルムで客死した後、彼の遺稿の中から発見され、その後に行方不明になってしまった一冊の「羊皮紙製のノート」がある。』[2]幸いにしてこのノートを直接見た伝記作者の詳細な報告が残されている。

『1619年11月10日の夜、一日中「炉部屋」にこもって思索にふけていたデカルトは、「この日、驚嘆すべき学問の基礎を発見したという思いで心を一杯にし、非常な興奮に充たされて眠りにつき、一晩のうちにつづけて天から来たとしか思われぬ3つの夢を見た」という。』[2]

この不思議な夢の内容をここで誤解を招くことなく簡単に説明することは困難です。「羊皮紙製のノート」の発見者の著書を基にした日本語解説書[2]から概要をまとめて記述すると伝言ゲームのように内容が変わってゆきます。

●インスピレーション

インスピレーションは覚醒時にひらめく場合と、眠っている時にひらめいて夢として見る場合があります。

インスピレーションの言葉の意味を辞書で確認して見ましょう。

--

広辞苑：

創作・思索などの過程において、ひらめいた新しい考えで、自分の考えだという感じを伴わないもの。天来の着想。靈感。

明鏡国語辞典：

天啓を得たように突然ひらめく考え。靈感。

--

デカルトも「天から来たとしか思われぬ3つの夢を見た」[2]と考えていたようです。つまり夢の中でひらめいたインスピレーションとってよいでしょう。

●インスピレーションの事例

インスピレーションというのはどのように閃くのでしょうか、当連載で何度か事例を見てきました。

モーツァルト（1756 - 1791）は一晩で作曲するという特技があります。心の中に音楽が一幅の絵画として細部まで詳細に映し出され、後は楽譜に書き写すだけの単純作業で人と話しながらもできると言います。天から絵画が降ってきて、モーツァルトはそれを楽譜に翻訳する。（第 26 回 流出システムと波動システム（2））

ヨハネス・ケプラー（1571 - 1630）は黒板に図形を描いていた時、惑星の軌道は 5 つの正多面体と球面の入れ子構造に重なるに違いないと一瞬に閃いたことをその日付（1595 年 7 月 19 日）とともに残しています。『数学の授業中にとつぜん大いに期待できる幾何学の図式にぶつかった。その思いがけない発見のために、もはや一瞬もじっとしておれず、昼も夜も頭はその図式でいっぱいだった。』（第 61 回 地動説正多面体モデル）

インドのシュリニヴァーサ・ラマヌジャン（1887-1920）は、夢に定理や公式が現れるという特異な数学の天才です。毎朝、証明のない結果だけを次々ノートに書き出します。そこにはすでに数学者の間で既知のものもあれば、まだ誰も知らないものも混在しています。150 年前にオイラーが解いていた式もあります。（第 65 回 非ユークリッド幾何学）

『血の滴が落ちる夢を見たとき、それはナラシムハ神（ナマギーリ女神の配偶神）の到来を予兆するものだ、と解釈した。「この夢を見ると、とても複雑な数字を含んだ渦巻きが僕の目の前で乱舞するんだ』」（第 66 回 ハーディとラマヌジャン）

これら 3 つの事例はインスピレーションの内容が具体的ですが、デカルトの 3 つの夢はこのような具体的なものではありません。しかし彼はこの夢により自分の進む道を確認します。『ワレ、イカナル人生ノ道ヲ歩ムベキカ』[2]...

以下次回...

参考書籍

- [1]デカルト、【訳】井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス
- [2]田中仁彦、デカルトの旅／デカルトの夢、2014、岩波現代文庫